昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可
昭和六十一年五月十五日　発行（毎月一回・十五日発行）

慈光

第三十八巻　第五号
（通第四四二号）

目次

信仰或問……近角常観……(2)
香月院語録……(7)
人生随想……柳瀬留治……(10)
真実世界……井上善右ヱ門……(12)
慈光日誌抄
——仏のみ名を聞く……西元宗助……(15)
無相法信
——我れは念仏者なり……岩崎成章……(17)
法悦その折々……花田正夫……(21)

御詫びと御禮

花田正夫　妻

謹みて申上げます。

慈光誌もみ仏様の御加護のもとに、先生方の御力添え、読者の皆様の御念力によりまして三十八巻を数えるようになりましたところ、この度花田こと急に病気を併発致しまして病気の進行が早く急ぎ入院療養を要する事になりました為、五号を以って廃刊の止むなきに至りました次第でございます。

今迄の皆々様の御愛読を心から御礼申上げますと共に御厚志に対し深く御詫び申上げます。

つきましては皆様方からお送り頂いて居りました誌代をお一人お一人にお返し致しますのが本意でございますが、花田は重症でございますし私は身体不自由にて臥床の有様でございますのでお返し申上げる事が出来ませず何卒御許したまわりますようにいくえにも御わび申し上げます。

花田もよく御礼と御詫びを申上げよと申して出ました次第でございます。

信仰或問

近角常観

◎或問　信仰なるものは熟々考うるに二種類に過ぎざるが如し。一は隠遁的に人生を退きて如何なることがありても之に甘んじてこれに任せて安心すること、一は進撃的に飽くまで奮闘して如何なる場合にも打勝ちて進まんとすること、この二種の何れかを選ぶものに非ざるか如何。

○如何にも信仰の人生に活現する有様としては消極積極の両面あるものなり、然れども真実の信仰なれば消極も決して隠遁退嬰の意味にあらずして、信仰上安んずべき所ありて動かぬのである、積極も奮闘努力の意味に非ずして信仰上所信の曲ぐ可らざるものあるゆえに、如何な障害をも排しても進むべき力を生ずるのである、しかしこは真実の信仰の上にあらわる、消極積極である、若し真実の信仰にあらずして仮設的の信仰ならば隠遁的進撃的の二者何れかに傾き易きものである。全体人間の性質が冥想的か実行的かの二者何れかに属するものである、是即ちいわゆる定散の二機である、冥想的な主観的な信仰は即ち定機にして、あきらめ主義隠遁主義に陥り易いのである、実行的な、理想的な信仰は即ち散機にして努力主義奮闘主義に陥り易いのである。

○冥想的な信仰は真実の信仰でない、自分の頭で作りて居るのである、主観的に仮設しているのである、仏様を有難いと心に思うているのである　たび〳〵言うことであるが、

或人が西有穆山師を訪うて自己の見解を呈した、曰く、天地宇宙は我と一体であると思うておりますと言えば　禅師は言下に　思うているだけが悪い　と答えられた、他力の信仰にも思うているのが多い、如来様は助けて下さると思うているものが多い、思うているのは苦しいことがあれば砕けて仕舞うのである、思うと思わぬの穿さくではない、如来様は真に助けて下さるのである。彼人は親切の人であると思うているのと、真実親切な人であるのとは大なる相違である。その親切に初めて感じ、その御助けを受けたのが真実の信心である。一たび如来の恵みを感じたならば　苦しければ、苦しいだけ益々かわらざる如来の真実が有難い。

たとえば画ける星ならば日の暮るゝと共に暗澹としてその光を失うも、真に天に輝く星ならば、世が冥くなればなるほど益々光輝を発するのである。思うている信仰なれば隠遁退嬰に陥るなれど、真の恵みをいたゞきたるものなれば世が当てにならぬほど仏の真実がありがたい、あきらめるのではない、恵みによりて生き返えるのである。かくてかって冥想的たりし信仰が廻りて真実の信仰に入りたのである、いわゆる定散共に廻して宝国に入るのである。

○定機において言うことは亦散機においても言うことができる。自分の頭で理想を作りて之を標準として飽迄実行せんと企てるのが散善である。廃悪修善をせんと奮闘するのである。しかれども理想は益々高くなるものなるゆえに、益々実行できぬ様になる、努力主義は遂に倒るべき運命を有するのである。こゝにおいて益々自己の罪悪深重なること、煩悩具足なることを見出すのである、しかるに仏かねてしろしめして煩悩具足の凡夫と仰せられた、こゝで初めてこの煩悩具足の我を見捨てたまわぬ親心に接したのである、理想が折れて頭を下げて親の御慈悲に摂取されたのである。そこで努力主義を廻えして真実の信順となったのである。かく一たび所信が立った以上は決して曲ぐることもできず、退くこともできず、そこで所信を確守することができるのである

○仏が助けて下さると思うて安心しているのも、自分の思いである、仏が有難いと思わんと試みて思えぬ〳〵と歎くのも矢張り自分の思いをたのみにするのである。たとえば人ありて直々親に遇うて伝言を承り親の真心を話しに来てくれたとき、これに答えて曰く、我は左様に思うている、かねてよりその通り考えているという返事をしたらば如何、必ずや態々これを言いに来て呉れたる人は言うであろう、そは汝の思いにあらずや　想像にあらずや、仮定に非ずや、我は親に遇うて而も汝に真心を伝えてくれとの依頼を受けてかく親の真実をお知らせするに、既によく承知しているような態度を示さるゝならば我が態々来れる所詮なしと、こゝにおいて初めて真の親の真心をいたゞきて申訳なかりと自覚するであろう。これ主観的の信仰を廻わして真実の信仰に入りたる有様である。又一人あり同じく親より直接の伝言報知をきゝながら　いや我はその様に思いたいと日夜務めつゝあるのである、せめて朝夕なりとも汝の知らして呉れるように、親を思い出したいと努力しつゝあるのである、されどもその様に思えぬので困るのであると答えたらば如何、前者の如く折角の報知を既に分っている様に思うも不可なれど現に親の真心を伝えつゝあるのに、思えぬ、分らぬ、ばかり言うて自分が親を思えぬことを苦にするも困りたるものである、必ず、その人は言うであろう、我は

汝にかく思えというのではない、汝は思えぬであろう、分からぬであろう、それ故我はまのあたり目撃したまゝを伝え親の真心を直々言うて聞かしている、しかるに徒にかく思いたい思わねばならぬと努力奮闘しているのは大なる間違いではないかと諭されたるとき、飜然心を廻わしてあゝ今までは親を思おう、仏を思おうと努力しつゝ、仏の私をかく迄思うて下さる御慈悲を知らなかったと、忽ち親の真心をいたゞきたならば、これ努力主義の信仰を廻えして真実の信仰に入る有様である、善導大師の二河白道の譬喩の如きは直々如来の方より招換したもう有様をたとえられたのである。汝一心正念直来我能護汝衆不畏堕水火二河は如来直々の仰せである而も一僧指授の教西方弥陀の直説である、和讃に曰く、善導大師証を請ひ、定散二心をひるがへし、貪瞋二河の譬喩を説き　弘願の信心守護せしむ、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏。五濁悪時群生海　応信如来如実言といい、道俗時衆共同心　唯可信斯高僧説と何れも直接信心の上より出でたる弥陀の直説である、伝言である、信ずる外に別の仔細なきなり。

◎或問　信仰のことを聞くに初めより人生のすべてのものを否定してかゝる傾向あり、かく言えばとて現代のものは中々承知し難し、或は知識、或は道徳、或は教育、或は実業、夫々人生に有効なればこそ勉むるのである。むしろ之を否定せず、生かして置きて、その上に信仰の必要を説きたる方適切なるが如し如何

○宗教といえども決して此等を否定するに非ず　然れども生死解脱、救済苦悩という宗教的要義に向っては此等のものは何等の力もないのである。如何に日新の科学であろうが、如何に最新の教育であろうが、生老病死の人生の苦悩を解脱し、生死を超絶するという問題に向っては何等の効もないのである、その点になれば知識でも、道徳でも　その極に達して突き当るのである、この突当る所に仏の救済が来るのである、その生死の苦海に浮沈するのを憐みたもうが仏の大悲である、学問を学問としてその効を認むるが、生死解脱の問題に達すれば突当りて何等の力もないのである、その力なきものを憐みたもう如来なれば　こゝに至れば人生のすべてのものを否定もせねばならぬ、罪悪たることを切言せねばならぬ、迷妄たることを警告せねばならぬ、人間の知識などの何等の力なきことを断言せねばならぬ、極言すれば他力の救済は我等が突当る点を憐みたもうのである、我等が突当る点をかねて知ろしめして、呼びかけたもうが仏の大悲である、特に絶対他力の救済は何れの行も及び難き点を憐みたもうが選擇本願の本意である、人生の何ものもたよることの出来ぬ点が如来大悲の起る根本である

○今生にいかに、いとほし不便と思ふとも存知のごとくた

すけがたければこの慈悲始終なしと言い。八万の法蔵を知るといへども後世を知らざる人を愚者とす、たとひ一文不知の尼入道なりといへども後世を知るを智者とす、と言い、何れも絶対の慈悲の前には我等の力は毫髪も間に合わぬのである、念仏はまことに浄土に生るゝたねにてやはんべるらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん総じても て存知せざるなり、たとひ法然上人にすかされまいらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候とあるが、知識も、学問も、道徳も、修養も全く何等の効もなきことを告白せられたのである。それ故次の文に

そのゆえは自余の行をはげみて仏になるべかりける身が、念仏を申して地獄におちて候はゞこそ、すかされたてまつりてといふ後悔も候はめ、いづれの行も及びがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかしと、

断言されたのが我等が何によりても安んずることのなき点を示されたのである。抑々如来の本願はこの点を御覧なされたのが大悲の淵源である、実は我等が自身でその効なきことを自覚できる人間ではない、仏かねてその辺を憐愍したもうたのが選擇本願である。

自力作善の人は偏へに他力をたのむ心欠けたるあひだ、弥陀の本願にあらず、しかれども自力の心をひるがへして 他力をたのみたてまつれば真実報土の往生を遂ぐるなり、煩悩具足のわれらは何れの行にても生死をはなることあるべからざるをあはれみたまひて、願を起したまふ本意（ひとへに）悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人もとも往生の正因なり、よて善人だにこそ往生すれ　まして悪人はと仰せ候ひき。

と実にこの大悲に遇いて我等は如来に御心配を掛けし悪人たることを自覚するのである。

○法然聖人が選擇集に発菩提心の出来ぬ戒定慧の起らぬ、六度の行の行ぜられぬ、孝養父母奉事師長の出来ぬものを助けたもう選擇本願なりと仰せられたが、他の弟子方は、勿論かくの如きものすら助かるのであるから、これ等の行の出来るものは勿論助かる、その様な危篤の病人すらこの薬で助かるなれば、病の軽き我等は勿論助かると考えたのである　即ち悪人なほ往生す況んや善人をやという考え方である、しかるに親鸞聖人はこの行の出来ぬものというのが即ち親鸞自身のことである、危篤の病人というのが親鸞のことである、若し外の行が出来るものならば何ぞ選擇本願を立てたまうことあらん、若し外の薬で間に合うものなれば、特別の妙薬はいらぬのである、善人なほもて往生を遂ぐ、況んや悪人をや、危篤の病人を助けるのが妙薬の功能である、まだ外の薬が間に合う様に思うているのが抑々我身知らずである、我等の助かるのは純一無雑大悲の恵ばかりで助かるのである、我等の智慧や学問が生死解脱のために間に合う様に思うているのは我身知らずである、専修念仏たゞ念仏ばかりという点が　他の学問や修行の効を認めぬ点である　救済の前には人生の何物もその益にたゝぬのである　したがって実に深酷なる罪悪観が起り来るのである、曽無一善、極悪最下の親鸞なりとのたまうたのである、これが在家たる真宗が出来た所以である。

○かくの如く深く罪悪観を起されしは親鸞聖人がエライからであると聖人を尊崇することは聖人は大いに迷惑に感ぜらるゝ、何んとなれば聖人を貴びたる結果は、聖人の信ぜられた仏の恵を眺めぬということになる。

勿論かくの如く自力の無効を認めるまで、即ち突当るまで理想を高めて実行されたのがエライとも言われよう併し結局その無効を認められたのであるから　前車の覆えるは後車の戒、自力無効に終りたのであるからエライのではない、それよりはむしろ之をかねてしろしめして選擇本願を立てたまいて我等のために正覚を成じたまいし親様の御慈悲を頂いて下されて、その頂かれたマゝを知らして下されたればこそ、我等は何れの行も及び難きものが同様に御慈悲をいたゞくことが出来るのである、聖人は自ら懺悔して無懺無愧のこの身じゃ、小慈小悲もなき身じゃ、この身を見捨てたまわぬ如来の願船じゃ、如来の廻向じゃ、同様にこの親様の御慈悲ばかりより外にないと知らして下さったのが親鸞上人の純一無雑の信である

○併しかくの如く一たび如来の慈光に接して見れば、この信仰の一よりあらゆる人生の力があらわれ出ずるのである。信仰に入るには人生のすべてのものが無効である、さればこそ仏も憐みたまい、又その救を受くるのである、されどその恵みに摂取せられて見れば、かって否定したる人世のすべてが立場を異にして人生に復活してくる、学問はますます如来の大悲の深きを知る学問となり　その信仰を基とする厳格なる道徳が起り、その信念を基礎とする政治、実業みな起り来るのである、いわゆる資生産業皆実相とでも言うべきように　その信仰の一によりて社会の何れの部分にも活躍できるのである。

○人生のあらゆるものを活かして置きては信仰には入れぬ、すべてを否定し、何れも無効であるゆえに唯一救済の恵を受くることができるのである、一たび信仰に入ればかって否定したすべてのものが信仰界中の力として再び積極的に皆活き返りてくるのである、諸々の雑行雑修自力の心をふりすて、一心に阿弥陀仏の御慈悲ばかりで安心したものゆえ、信後の行為みなことゞく仏恩報謝の経営としてあらわれ来るのである、これ即ち徹底したる真諦より自然に真面目なる俗諦門の流れ出ずる所以である。

香月院語録

○

向うからのお持ち掛け

後生たすけたまえと願うと云えばとて、こちらから持ち掛けて願うことではない。諸仏には我々をたすけようとの本願がないから、こちらより持ち掛けて願わねばならぬが、弥陀仏は、たすけるに間違いがない程にと、向うから持ち掛けて下さる。しかればこちらから持ち掛け願うにはあらで、頼め助くるの勅命に、帰しまかせるが願うのなり。

○

一念同時

頼むというは、機の方から法の方へ帰すること、聞其名号と、本願名号の謂れを聞き開いて、信ずる処に、同時にたすけたまえの心起るなり。故にただ大様に聞くに非ず、無名無実に聞くに非ず、念仏するものを御助け、頼むものを御助けと、空聞きするに非ず、助からぬものを御助けぞと、実に信じて帰する処に、助けたまえの心あるなり。

鎮西の義は、南無阿弥陀仏を稱えんための助けたまえなれども、当流は願力を信ずる助けたまえなり。その故に煩悩具足の凡夫、助からぬものを御助けぞと信ずる心に、助けたまえの心あり、若し助けたまえのない心ならば、実にたのむに非ず、しかれば信ずるとたのむと一念同時ゆえに一念往生治定と云うなり。

○

正定業

念仏を稱えて、それで往生定まるに非ず、願力の信心で決定業を得たゆえに、往生の業定まるなり。千返万返稱えても、決定業の定まらぬうちは、正定業定まらず、信心の因の入った処で正定業なり、これを順彼仏願故の稱名正定業と名くるなり。故に『執持抄』には「弥陀の名願力を稱念すとも、往生なお不定ならば、正定業とは名くべからず、我すでに本願の名号を持念す、往生の業成辨ずることをよろこぶべし」とあり。

○

義なきを義とすと知るべし

信ずるとは、あるまじきことのあるを信ずるなり、ここを疑うゆえに諸仏の証誠が要るなり。弥陀の本願を信ずるは、助かるまじき者がたすかるとの諸仏の証誠なり。故に第十八願にも、誓いの言葉に、若不生者とありて、往生すまじき者が往生し、助かるまじき者が助かるは、あるまじき処なれども、今善知識の教により、本願他力の不思議によりて、助かられぬ者が、いよ〳〵助かるぞと信ずる故に、本願を信ずる行者と云うなり。

○

無我

聖道門では、無我の空理を観じて、我なしと証らねばならぬ。当流には、我なしと証れではない。当流において御法義を談じ合うのに、人のはわるい、我のはよいと云う。その我と思うことは、いささかもあるまじきことなり。善知識が仰せられても、己れがよいと意地張るのが、我はわろしと思わぬなり。他力の御勧めを聞き得たものであろうならば、ゆめ〳〵我れと云うことはあるまじきなり。

○

変らぬ所がめずらしい

当流の御教化は、いつも珍らしからぬことばかりかと云うに、そうではない。このいつも変らぬ所が則ち珍らしい教化なり。頼む一念で凡夫が仏になるという程、まあ、珍らしいことはないにより幾度聴聞してもこれが珍らしい。幾度も〳〵これを尋ねて聴聞せねばならぬ。

○

仏恩報謝

有難や尊やとも思わず、ただ自然と念仏の申されるのは誤りじゃ。仏恩報謝に非ずと云うは、それが大きな誤りじゃ。ありがたや尊やと思わず、ただ自然と稱名の稱えらるるのは、即ち仏智の御催促、仏恩報謝の稱名なり。

本願の起りを善知識の口より聞き得る時、弥陀の光明に摂取せられぬれば、摂取の力にて、名号は自らとなえらるる、何とも思わずに自然と稱えらるる稱名念仏、それが即ち他力催促の念仏なり。

○

眼なり肝なり

『禮讃』に「稱我名号下至十声」我が名を稱うるものを助けるとある御誓は、「不取正覚」の保証つきなり。元祖はこの文を常に口に稱え、心に浮かべ、眼にもあてよ。この文は四十八願の眼なり、肝なり、四十八字に結びたることは、この故なり、とのたまう。弥陀の本願むなしからぬに極りたからは、稱うる衆生の往生、いよ〳〵間違いなきなり。

「若我成仏…必得往生」

信　楽

○

信楽とは、法蔵菩薩が、是非たすけずばおくまいとの、決定した御誓なり。この如来の方よりの、是非たすけずばおくまいと云う、誓心決定の大悲が、行者の胸にあらわれたればこそ、疑い深い凡夫が、二の足ふまずに信ずるなり。

心　多　歓　喜

○

他力の行者が、平生心に弥陀を念じ、口に弥陀の名号をとなえるその憶念稱名の心持ちは、摂取の弥陀は常に我が前にましますと思うて念ずるなり。三世千方の諸仏の中で、我をたすけたまうは唯弥陀一仏、これに上こす仏はおわさぬと思うて、常に念ずることなり。

形はいかようなりと云うとも、罪は十悪五逆の凡夫なれども、常に弥陀は我が前にましますと思いて、弥陀を念じ弥陀の名をとなうるゆえに、これほどありがたきことは無きなり。そこで歓喜多しとなり。

浄土門は愚痴にかえりて

○

聖道門では、発心の最初から、若し我身を凡夫と思えば、三世諸仏のうらみと云う、自力の智慧を先に立ててかかるなり。浄土門は愚痴にかえりて法を信ずるゆえ、おのが機を見限らねば、本願は信じられぬ。我が身に善根あり、出離の縁ありと思うものは、弥陀の本願を疑わずとも、本願は信ぜられぬ故に、我が身は悪しき徒らものと、思いつめてかからねば、本願は信ぜられぬなり。

御　慈　悲

○

或る人曰く。私は平生常に口では如来様の御慈悲は広大なことじゃとは申しますけれども、そのお慈悲は知れませぬが、何卒お聞かせ願います。

講師曰く。なるほどその通りお慈悲と云うことは、人々口では申せども、そのお慈悲を知る人がない。お慈悲とは天が地へひっくりがえっても、また大旱魃になるとも、悪人女人が成仏するということは無いこと。そのないことをば、一番かけて呼んで下されたのが弥陀の御慈悲じゃ。

宗祖の御苦労

○

今家は一念の処で、稱えるものをおたすけと、本願他力を信じた一念なり。そこで本願が有難うてならぬ。助かる縁のない者が、稱うる者をお助けと聞いて見れば、稱うる稱名は仏恩報謝に違いない。吾祖御一生のご苦労はここばかりにて、他流と異る他力の念仏をお勧め下さるなり。

人生随想

柳瀬留治

人生は孤独である

我々人間文化は群居本能がもとで社会を造り文化をつくるのであるが、動物にも群居本能がある。重に草食動物で、羊や馬や牛、野山では猿や、縞馬などで、敵が襲うと集団をもって防禦する利益からのようである。

人間社会になると複雑である。労資の対立から巨大な資本に対し集団で当る。それは政治にも国際間にもある。人間は誠に勝手なもので、こちらの御都合次第で集団で当り、またうまい口を見付けるとこっそり一人独占しようとする。そしてそれを侵そうとする者に対して戦を挑む。肉食動物の対手を倒して食らうのとえらぶ所はない。

「それは物質生活だけだ愛情世界は違う」と言われるかも知れぬが、愛情も「水心あれば魚心」式と遠くはないもの、心を洗い晒し語合う仲の離反は愛が強いだけ憎が強くなる。それが妻を殺したり子が親を殺したりもする。愛情欲求の相反した時にそれが起る。物質的利益と大した違いがない、物質か感情かの違い目に過ぎない。

法学や社会学で社会を分けて利益社会と共同社会にしている。国家や職業組合労働組合は利益社会だとし、家庭だの文化集団や宗教信徒などは共同社会だとし、愛の精神から結ばれるものとしているが、その最も愛情によって結ばれている筈の家庭さえ最近共同社会であるか疑わしくなって来たという。欲求がくい違うと骨肉相反目し殺し合うからである。欧米も日本も家族は夫婦単位となり、信じ合えるのは夫婦間だとしているが、それさえ嚙み合い殺し合うに至っている。悲しい哉、人間の情愛は相対的なもので、愛と憎は一枚の紙の表と裏に過ぎず、欲求が満たされると愛し、反すると憎む。

又真実の情を以て憐れみ悲しんでも、人間である。慈悲にも限度がある。子供の不具や精薄を憐み悲しんでも人間の力では如何とも為し得ず、共に抱き合って泣くのみである。特に死に瀕した親や子に対しては、人力が絶し何ともならない。誠に「独り生れ独り死に独り来って独り去る」のみである。誠に人間は孤独である。それが知られて真の

芸術、真の宗教が起って来、意義を生じるのである。彼の芭蕉翁も人生の孤独に徹してかの芸術をなした。法然も親鸞もそれなるがために救われ光を見出したのである。

人間の真実、情愛というも誠にはかない風前の灯火の如く当てにならぬもの、まして頼みにしている巳の生命もである、我も人もこうした世に遇々利益を超えた情けにふれて忝なく有難く、その思い掛けなさに額を垂れ感泣される。孤独な人間生活中に宗教は誠に人生のともし灯というべきものである。

日々是れ好日

大自然、而も宇宙の運行そのものには暦日などないであろう。我々の世界にそれがあるので、事のけじめが付き、さっぱりした気持にもなる。

元々草木が芽ばえ、花の咲く季を春とし、その春の始めを年の始めとしたことが知られるのである。旧年の煤を払い、一つのしめくくりを付け、年を迎えるということは、生活上意義があり嬉しいことである。

「日々是好日」の語がよく言われるのである。この語は碧巌録の第六則に掲げられた雲門の垂語で、彼の垂語を雲門四世を嗣いだ僧雪が編み、頌を以って奥意を示したのである。元雲門は道を求めて僧陸州の門を叩いた。

刻下に言を求められたが吐かないため彼を門外に押出した。更に訪い来って門を叩き三度目には片脚を門内に入れ押出されまいとした。陸州は「さあ道へ、さあ道へ」刻下に言を求め門を閉めようとする。雲門は戸に脛を挟まれ痛さに堪えず、進退窮した刹那、道を悟った。恐らく彼が今迄の願いは、道を得て心の闇が晴れ、一大転換して明るくなろうとし、大悟を得て仏性を得んが為であったろう。将来に光を求めてのことだったろう。ところが刻下闇に迷っている己、行先も同様な一箇の己だ。それ以外に仏はない。と悟ったのであろう。それが判った彼は闇即ち光であり、日々好日ならざるなしである。その彼は雲門山において衆に対し、日日是好日将来に光を求めるでない。刻下の日日是れ光だと垂示したものと解される。

わが近角常観先生もそれに似たことを常に言われた。「君は今、人生全く仕様がなく、自分の心が浅間しく、くら闇で困っているのでないか。今現在光のないのが君である。仏が判ったら、信が開けたら、など将来へのみ逃げている。現在の君、それだけが君の全体なんだ。将来へ将来へと幻を追っかけて逃げる、それを迷いというのだ。それで肱劫より流転し、このさき未来際に流転するのだ」と、現在刻下の己の一点に釘を刺されるのだった。陸州が門扉の間、雲門の進退を押えた、それと常観先生の現在の己の一点を押えての言が、共に相通う偉大な垂示だと思うのである。

真実世界

世界という言葉はいろ〳〵に用いられますが、先ずその人の住む境界と申してよろしいでしょう。その住む世界を固定的に考えて、それより外に世界は無いと思い込むために、宗教を誤解して幻想と考え、これを無視または否定している人が多いと思います。青年の人々の躓きもここにあると感じられるのです。

現代人は物質と科学の中で育ってきたゝめに、感覚で触れうる世界と科学的に思考しうる事柄だけを確かな世界と思い、それ以外のものは心の影であり夢であるという思いに住して受けつけようとしないのであります。

けれども人間の思考の及ばない事柄も随分とあります。

テレビに次のような研究者の対談がありました。人間の免疫機能というのは実に精巧微妙なもので白血球が体内に侵入した異物や菌を攻撃するリンパ球と三種類の白血球がそれ〴〵の分担を果しながら侵入者に挑みかゝる。その仕組は実に巧妙で、どうしてこんな作用ができているのか、

井上善右ヱ門

これは神様の造られたものというより外にはない……こんな対話がありました。現代人の無理からぬ言葉ではありましょうが、人間の思考の及ばないところへ神様をもってくる、それは宗教とは程遠い意識の扱いといわざるをえません。

感覚に映ずる世界と合理的思考だけを確かとしてその上に打ちたてた人生に生きているのですが、人生そのものにはそうした世界に尽くされないものを含み宿しています。人間は誰一人として避けえない死という現実に直面します。そのとき今まで住んでいた世界の根底が崩れてゆきます。自己が自己の支えを失おうとするとき、この自己が何であったのか、何のために生きてきたのか大きな疑問の渕に陥ちます。あくそくと命をかけて追いかけてきた事が幻に転じて底知れぬ空しさに襲われます。しかしこのような空しさに出会うということは重大な意味をもつことであります。

十七世紀フランスにパスカルという思想家が現われまし

た。彼は人間を深く洞察した人です。パスカルは人の本質を二つの両極端において捉えました。その一つは人間の「みじめさ」であります。みじめさは同時に「むなしさ」でもあります。果敢なく、か弱く、しかも誤謬と虚偽と欺瞞にみちている、ところがさらに一方の本質として真実と別離することのできない存在なのであります。この両端の本質を喩えて、風になびく一本の葦のごとくみじめな弱い存在でありながら、たゞそれだけではなく、真実との関係を自覚することを「考える葦」であると表現したのは人の知るところです。そこにみじめさと偉大さとが重なっているのです。自己のみじめな空しさを感じるということは、真実と離れることのできない関係の中から生れることです。死に対面して何もかも崩壊するみじめさを、自己の悲惨な現実として自覚せざるをえないところに大切な意味があります。悲惨を悲惨と感じることは偉大であると言わざるをえません。「そらごと、たわごと、まことあることなし」と申された親鸞の御心が偲ばれます。

世には「死は問題にする必要のない事だ」という人があります。肉体は死するものと決っている。死にのぞめば意識がだん〳〵と薄れて遂に消滅するだけのこと、恐れることも心配する事もない。怖がるのは本能感情だから別に取上げる程のものではない。死を気にするのは無駄なことであると。こうした言分は一見尤のようにきこえるかもわかりません。しかしそれは人間にとって極めて大切な事柄を放棄するものです。言わば人間の死を動物の死と同じ次元において、けりをつけようとするものです。人間が人間の生の無意味と虚構と空しさを感じるということは、その空しくもみじめな状態に自から留っている事を許さず、より真実な自己に帰ろうとするからです。パスカルが「考える葦」を偉大といったのはそのためであります。

自分のみじめさを感じ、自己の意義と存在に疑問をもつのは死に直面したときに限るのではありません。人間の生の随処は死に接しています。死の上に浮んでいる舟が生であるといってもよいでしょう。無常を感じるということは起らざるをえずして起る出来事です。人間と生れて最も大切なこと最も貴重なこと、至上の価値と意味ある事柄が、今われわれの胸の扉をたゝいているのです。そのときわれわれには心の奥底から今までなかった真実なる自己への切なる願いが湧きます。それに比すれば今までの願は夢の世の願望として色あせるでありましょう。その根本の願いに応えるものこそ真実の宗教であり、本願真実の世界です。その本願に値うとき、虚仮不実を離れた永遠の世界がわがいのちと共にあることに気づかされます。虚仮の迷より永遠の真実に入らしめられるのが会仏の世界であります。そ

の世界の確かさを知らずして、やがて崩れる世界に固執していた事の果取なさが深く感じられます。

本願真実の世界は、見たり触れたりする世界ではありません。われわれの胸の中の闇を解決し照し満す確かな世界です。確かな世界という事は夢でも幻でもない明々白々の真実世界がそこにあるということです。その世界に入れば、今まで虚仮でしかなかった人生の現実が、不思義にもそのまゝの姿で新しく蘇ります。自然法爾の言葉がそれを示しています。念仏は如来真実の御力をこの身に受けることでありますから、その真実に心が安らい開かれると、こうしてはおられぬという気持が必ずや催されてきます。こだわらずそのまゝ受けとって対処する活動が促されてきます。本願が架空な夢なら、現実を光あらしめるような奇しき働きがよも生れはしますまい。真実はそれ自からが確証するものです。それをこの身に全うするのが念仏の世界ですから、本願と念仏とは表裏一体の真実世界と申すより外ないのであります。

あさまし

浅原才市

あさましや
あめのふるほど　つみかぶる
六字のうえに　ふるつみは
つみはふれども　みなきえる
なむあみだぶに　てらされて

○

あさましの
じゃけんのつのが
はえたまんまで
おやにとられて　なむあみだぶつ

○

あさましが　ないならば
みだの浄土は　できんのに
あさましが　あるゆえに
こさえてもろた　みだの浄土を

慈光日誌抄

――仏のみ名を聞く――

西元宗助

春のお彼岸が、今まさに終ろうとしている。その彼岸の中日に、末娘の嫁ぎ先の愛知県蒲郡のお寺にお参りさせていただくと、誌友の白川榮さんとその御令妹も参詣くださる。

白川さんは、花田先生の慈光社のお世話を、なにかと、それとなく見てくださっている方々の中のお一人である。先生は春暖になるにつけ快方に向っておられるようでしてとの嬉しいお話を承る。

○

仏光寺本山の『ともしび』誌に目を通すと窪沢泰忍師の坐談のよきお言葉が載っていた。今その一部を、なるべく原文のまま要約すると、「ひとびとは、表向きどんなに仲善くしても、心底では己を是とし他を非とし、互いに相手を否定しあっているのが人間を裸にした姿。それで曽我先生は〝和とは不和を悲しむ心だ〟と、おっしゃっている。ところが、われわれは、なかなか不和を悲しめない。どこまでも相手を責めるだけで。だから我らは、どうしても阿弥陀仏の深いいのち―お念仏の喚び声にあわなければ、どうにもならないと。

窪沢師は新潟県寺泊の聖徳寺のご住職。仏光寺派の大会で、お参りさせていただいたことのあるお寺。たしか数年前、ガンの手術をなさり、いよいよ生死巌頭に立ってのご法話と承る。

○　○

久振りに―十数年振りに、足利浄円先生の名著『一樹の蔭』（百華苑刊）をひもどき、その中の「聞名の宗教」と題する一文を殊にありがたくいただく。いまその一節を左にかかげてみる。

「聖人の宗教は、聞名の宗教であります。念仏とは御名を聞くこと。つつしんでみ名に於いて、打ちあけられてある如来のお心を聞くことであります、如来の自分を喚びさましてくださる御声を、そのまんまに聞くところに浄土真宗の全体があり、親鸞聖人の宗教のありたけがあります云々」と。そして結ぶに、『教行信証』信巻の聖人の讃嘆のお言葉―「如来は清浄の真心を以て円融無碍、不可称、不可説、不可思議の至徳を成就したまへり。如来の至心を以て諸有の一切の煩悩、悪業邪智の群生海（われらのこと）に廻施したまへり」を以ってしておられる。

まことに他力のご信心は、機法二種の深信なる故にこそ、機法一体のただ南無阿弥陀仏であることを、浄円先生のご生涯を偲びながら身に泌みてありがたく思わせられる昨今である。

○　○

このたび龍谷大学大学院課程をめでたく修了してアメリカに帰る二世、三世の日系アメリカ人の、市山クレア嬢と原田マービン君の歓送会に出席する。クレア嬢は八ケ年、マービン君は五ケ年、留学していただけに勿論日本語も達者、それに人柄が実によい。わたしの講義も熱心に聴講し、質問もよくしてくれた。

クレアさんはハワイの開教使に、マービン君はカルフォルニアの開教使に、それぞれ内定しているという。なお主任教授の信楽峻麿教授の送別の辞と、ご法話も亦、情のこもった有難いお言葉でありました。

南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏

――×――×――

NHK京都文化センター―講座御案内

親鸞・歎異抄に学ぶ

講師、京都府立大学名誉教授　西元　宗助

曜日、第二、第四木曜日、午前十時―十二時

受講料　六ケ月（十一回）一七、六〇〇円

テキスト　安良岡康作訳注「歎異抄」旺文社文庫

所、京都市下京区東洞院通塩小路下ル東塩小路町

ルネサンスビル内　NHK京都文化センター

講師のことば

歎異抄ほど、心ある人々に親しまれてきた宗教書は他にあまりないのではあるまいか。

同書は、親鸞の弟子の唯円が、聖人没後、その仰せの言葉を書きしるしたものが中心となって、そこには珠玉の言葉がみちている。

例えば「善人なをもって往生をとぐ、況んや悪人をや」とか、「親鸞は弟子一人も持たず候」とか。なお歎異は「異るを歎く」であるが、歎かれているのは誰であるのか、案外自分であるのではないか。この辺にも重大な問題のあることが想われる。原子核のこの危機的時代において、この古典書を、私は御参加の皆さんと共に、あらためて学びたい。特に初心者を歓迎し、質疑応答を重んじる。

無相法信

――我れは念仏者なり――

岩崎成章

（昭和六十年）

今朝は東京地方は実に二年振りの大雪にて、参詣者もなく、書斎にこもり、過ぐる昭和五十六年の福井地方の、昭和三十八年のイワユル（三八豪雪）以来の希有豪雪にもかかわらず、正月四日に和上苑をおたづねしたことが思い出され、その時の書信に曰く、

昨日は雪の中、途中から歩いてまでして、よく御来苑下さいました。一昨年秋以来、よくまあ、毎月つづいて、遠いところを、大変なお金と一日、二日を使って、来て下さることで、我々二人を親しませて下さる如来様の願心、願力のかたじけなさを、改めてしみじみと思わせられることであります。又奥様にも心からお礼申し上げたくしみじみと思うことです。どうか〳〵奥様におとりつぎ下さいませ。

又得度して下されし御次男様のお心ありがたく、又御長男徹様が、このごろ、いかなる動機からにせよ、朝のオツトメに出られ、大声で念仏申されるとのこと、これまた、実にありがたいことと存じます。われ〳〵とても、どれだけ御長男様と、その動機がかわったことがありましょうか、

凡夫は所詮、ソラゴト、タワゴト、の心のまま、念仏申すほか、念仏の申しようはないことで、ただここで、しみじみとまことにありがたいことは、いかなる理由、事由にもせよ、このごろ、大声で、念仏されるということ、ともかくもお念仏申されるということは、まことにありがたいことにて、バックにて、如来様が、どれほどか、御苦労下さっての上での、徹様の称名念仏と存ぜられます。その点私共とてもまったく同じことにて、如来様の御苦労あってこそのお念仏で、なんとしても、凡夫の力にて、一声の念仏も申されることでありませうか、ナニカを因縁として如来様の御苦労、真実方便によりて、われ〳〵も、徹様もお念仏が申され、御次男様も御得度されしことと思わずに居れないことであります。だまってニコヤカに、だまされてやって下さいませ。如来様もわれ〳〵のカラ念仏を、だまって、ニコヤカに、お、よし〳〵と受けとっていて下さることでありましょうから。

さて私は、昨日、私は本願念仏でなければ、どうにもならない人間であるが、その私そのものは、仏法者でも、念仏者でも、信心の行者でもなく、ボーホー、センダイの外道、ドロ〳〵ボロ〳〵のドロ凡夫であると言う意味のこと申上げましたが、今暁、二時二十分に、つぎのこと、ハッキリと思い知らされたことでした。それは、ああ、知らざりき、あゝ我れは念仏者なりき、ということであります。しかしそれは謗法、センダイ、の外道、ボロ〳〵の煩悩者の私が、本願を信じ、念仏を申すから、念仏者というのではありません。私の自性も現実も、とても世の常の本願を信じ、念仏を申すというようなありがたい念仏者では、さら〳〵ない、邪見憍慢の無信の悪衆生たること、非念仏者であることは、昨日も、今日も、今後も、ます〳〵かわらぬことであり、その意味では「念仏者」などとは全然思えず、まことに悲しい、はずかしい存在でありますが、此の、イワユル〝念仏者〟でない私が、ナゼ今朝は、ああ、知らざりき、知らざりき、ああ、我れはこのまんま、念仏者なりきなどと、とんでもないことを言うかと申しますと、それは、今暁、「仰せぎり」ということから思い知らされたことですが、道綽禅師御和讃に、縦令一生造悪の衆生引接のためにとて、〝称我名字〟と願じつつ、〝若不生者〟と誓いたり。とありますが、これは十年余前の〝念仏詩抄〟にもひらめきのまゝ、次のように書いてあります。

念仏衆生
ナムアミダブツと
いうことは
如来法蔵さまの
お呼びかけ
念仏衆生と
いうことは
呼びかけられた
もののこと
念仏衆生摂取不捨
念仏衆生摂取不捨
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

今朝は、その呼びかけられし者のことということがヒドク痛感されたのであります。

それは

念仏者ということは、私が本願を信じるとか念仏申すとか、いうことではなくて、私がどんなに非仏法者、非念仏者であり、逆謗センダイの外道、ドロ〳〵ボロ〳〵の箸にも棒にもかからぬ者であっても、今朝の私には、如来様か

ら、〃称我名字〃〃我が名を称えよ〃〃ただ念仏せよ〃と呼びかけられている者が、この「私」のことであるならば、私が本願を信じようが、信じまいと、私が念仏申そうと申すまいと、私が逆謗センダイの外道であろうとなかろうと、そんなことは一切関係なく、私にしても、だれにしても、ただ如来さまから〃称我名字〃〃我が名を称えよ〃〃ただ念仏せよ〃と呼びかけられた者であるならば、その如来様から、呼びかけられた者は、一切〃念仏者〃であるといただかれるのであります。

そう云う意味で、私はこんなヒドイ非仏法者、非念仏者、ニセ信心者、謗法センダイのドロ〳〵ボロ〳〵の人間でありましても如来様から〃称我名字〃〃我が名を称えよ〃〃ただ念仏せよ〃と呼びかけられている私である以上、ただそれだけで、如来（仏）に呼びかけられ、（念じられ）如来に、一人子として、思われている者として、如来（仏）に念じられ、呼びかけられている者として、〃念仏者〃である——。仏に念じられて上まぬ者として〃我は念仏者なり〃と思わざるを得ない今朝の私なのであります。

真の念仏者とは、如来を信じ、念仏申す者のことではなくて、如来に、仏に念じられている者として、〃称我名字〃と如来に願じられ、若不生者と誓われている者こそ、真の念仏者である、ああ我れは念仏者なり、とそう云う意味で喜ばされていることであります。

如来に依りて、仏に依りて切々と〃称我名字〃と願じられ〃若不生者〃と誓われて止まぬ者こそ念仏者でありました。しあわせ者でありました。〃弥陀五劫思惟の念仏往生の願〃こそは正に私のためでありました。

それ故にこそ聖人の常の仰せが、〃弥陀五劫思惟の願をよくよく案ずればひとへに親鸞一人がためなりけり、されば そくばくの業を持ちける身にてありけるを助けんとおぼしたちける本願のかたじけなさよ〃であられたのでなかろうかといただかれることであります。

その〃助けんとおぼしめしたちける御本願〃こそは〃念仏往生の誓願〃称我名字の御本願、ただ念仏せよの御本願であり、そのただ念仏せよ〃称我名字〃のお呼びかけ、仰せは、かかる非念仏者、外道の私にふりかかっている仰せでありました。

仰せぎり、おとどけぎりで、

〃称我名字〃の御仰せがふりかかって止まぬ私ゆえ、この私が明らかに、その意味において、だれはばからぬ、〃念仏者〃でありました。そう云う意味において、岩崎様も、奥様も、御長男徹様も、御次男様も皆、如来様、み仏に念じられ〃称我名字、若不生者、不取正覚〃と呼びかけられ、如来の仰せのふりかかっている者、すべて、〃念仏者〃であ

るまいか、如来の仰せ呼びかけのふりかかっている者皆、逆謗も外道も皆、〃念仏者〃でありました、御同行、御同朋でありました。

ただ念仏して弥陀に助けられまいらすべし
極重悪人唯称仏との
仰せぎり
おとどけぎり、でありましょう。

われわれ、ソラゴトタワゴト者の信も行も、間に合わぬもの、

ただ、ただ、仰せぎり、おとどけぎり
とどいたか、聞こえないかは問題にあらず、
ただ、仰せぎり、仰せぎり
ナムアミダブツの仰せぎり
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ　　合掌

正月五日未明五時三十分記とありました。

——○——○——

病床六尺

子規　居士

或人からあきらめるということについて質問が出た。死生の問題などはあきらめて仕舞えばそれでよいという事と、又かって兆民居士を評して、あきらめる事を知って居るが、あきらめるより以上のことを知らぬと言った事と撞着して居るようだが、どういうものかという質問である。

それは比喩をもって説明するならば、ここに一人の子供がある。その子供に、療養のために、親が灸を据えてやるという。その場合に子供は灸はいやじゃと云うので、泣いたり逃げたりするのは、あきらめのつかんのである。若しまたその子供が到底逃げるにも逃げられぬ場合だと思うて親の命ずるままにおとなしく灸を据えて貰う、これはすでにあきらめたのである。併しながら、其子供が灸の痛さに堪えかねて灸を据える間は絶えず精神の上に苦痛を感ずるならば、それは僅かにあきらめたのみであって、あきらめるより以上の事は出来んのである。若しまたその子供が、親の命ずるままにおとなしく灸を据えさせるばかりでなく、灸を据える間も何か書物でも見るとか、自分でいたずら書きでもして居るとか、そう云う事をやって居って、灸の方を少しも苦にしないというのは、あきらめるより以上の事をやって居るのである。

病気の境涯に処しては、病気を楽しむということにならなければ生きて居ても何の面白味もない。

Auf wieder sehen.

法悦その折々

花田正夫

倶会一処

本願を聞き念仏申す者は皆浄土に生れ、諸々の上善人と一処に会することを得しめん、と阿弥陀経に説かれている。然し現世の事のみを考えて、そうした恵みを軽く考えていたが、自分が老化の波にさらされ、病気勝ちになって来た今日、この御誓のただならぬ御慈悲であることを知らされはじめた。

中国では別れる時、再見と云い、ドイツ語にはまた会いましょうと云っている。人生において別れきりになることは堪えられないところからこうした言葉が出てきたと愚考する。「不帰の客となる」とは死ぬことである。

然しいくら嫌悪しても死別はまぬがれない、永遠の別れである。仏はかねてこれを悲憫されて大無量寿経に

「人世間、愛欲の中に在りて独生、独死、独去、独来。……遠く他所に到りぬれば能く見る者莫し、善悪自然に行を追ひて生ずる所、窈々冥々として別離久長なり、道路同じからずして会ひ見ること期なし、甚だ難く甚だ難し。復相値うことを得んや云々」

と、哀々切々と教えられている。

池山先生の御晩年に大病せられた時、南米ペルーから御長男の寿夫様が見舞に帰られ、やがて再び出発された際

会うてまた別るる日なり今日よりはまたのあふ日のめぐりそめける

と詠じられた。またの会う日は、地上では望めない、これは浄土での再会を歌われたのであった。しかも単なる我我の願望でなくして、仏によって誓われ、成就して下された大道であった。

不思議な御縁から共に念仏申す友であった渡辺紋一医師の最後の見舞に行った時、この世の御縁は無常の嵐に消えて行くが、念仏の御縁だけがいつまでも残って下さるね、と、語り合ったことも忘れ得ぬことである。

○

『ありそなこと——南無阿弥陀仏』

池山先生の遺稿が再版されその著書の題にこの言葉がある。これはドイツの作家チョケの手になる短篇小説の題である。

その中に、参議ストリークには（エスイスト　ゼヤーアメーグリッヒ）という口癖があった。直訳すると〝それは甚だ可能である〟というのだが砕いて言うと〝それは随分ありそうなことだ〟とか〝大方そんなことになるかもしれない〟とか〝そうしたことも無いとは限るまい〟とかいった意味で、折りに触れ、機に臨んでしきりに繰り返したのであった。

この言葉が参議の口癖になるには、彼の青年期に、竹馬の友に裏切られ、相愛の女性にも背かれるという悲惨事を経験してからであった。彼はこの言葉によって立ち上れたのであった。

然し我々はいつも甘い感情に支配されて、自分に都合の悪いことは拒否し続けている。このことを徹底的に見抜かれたのが仏であり、そこにまた仏の慈悲の発動があった。池山先生がそこに着眼せられて「ありそなこと——南無阿弥陀仏」と題されたのであった。

私自身は、歎異抄にある「さるべき業縁の催せば、いかなる振舞もすべし」という一句に救われたのである。八万四千の煩悩を具足した身とて、それ相応の縁にふれると、どうした業さらしをもしかねない身と仰しやって下さる聖人の深く広い御理解の上からの慈悲あふるるみ声に接して、悪から悪へと転落する身を支えられたのである。

○

あとで知ったことであるが「さるべき甚兵衛」と世間から評せられた好好人があった。さるべき業縁の催せばいかなる振舞もすべし、という聖人の仰せが身についた人であった。

ここで聖人の御心中をうかがう時、聖人は人々の業縁のままに織りなす一切のことを、自分も同じだよと、同座し、同心して下さるのである。この御心を通して私は弥陀仏の無碍の心光を仰がせていただきはじめたのであった。罪業深重の身とて、一切の人々から呆れられ、見捨てられるべき身も、こうした聖人ましまして救い上げられるのである。

私の京都時代に、藤原あきさんが、御主人と子供を捨てて、藤原義江氏のもとに走った時、世間は挙ってその非行をあげつらった。ところが池山先生の御宅をお訪ねした時、当時四国の医師で念仏に熱心な人がその著書で、藤原あきさんを人非人と罵っていたのを指示されて、もとより藤原さんはわるい、然し念仏の上からは、それだけではすまされぬ。自分も亦どうした業縁でもっとひどい罪業をやらかすかも知れたものではないからね、と仰っしゃって、静か

に念仏していられた。そしてこの参議のように、又聖人のこの「さるべき業縁の催せば云々」の一句を身につけて味うように、そうなれば自分の見る世界が一変するから、と加えて仰しゃった。

没法子（しかたがない）

私が大連の関東別院に二年間勤務したことがあるが、当時の満人の口から「没法子」という言葉がくり返されていた。そうした時、支那服をつけて、阿片窟に入って見ると、立派な青年が、暗い部屋で阿片をたしなんでいた。ひそかに彼等の心を推察するのに、はじめロシヤの占領下に立ち、次で日本の勢力下に暮す若者で、力のある人は他国へ飛び出たであろうが、それも出来ぬ者としては、阿片と没法子を繰り返すことによってやっと生活を支えているのを知らされた。

日本語では「しかたがない」とでも云えよう。上海では馬々虎々（ママフウフウ）と云い、イタリー語では「ケー・セラセラ」と云う。もとより愚痴であるが、彼等はこの一語を発すると、暗い問題をケロリと忘れて、日々の勤めに専念しているのに驚かされた。

私の二ケ年間の大連生活で身にしんで覚えた中国語はこの一句であった。そして「さるべき業縁のもよほせばいかと、若山牧水も詠じているが、この実状を見抜かれて

生死の苦海ほとりなし　久しく沈める我等をば
弥陀仏誓の船のみぞのせてかならず渡しける

と親鸞聖人も讃えられたのである。

大無量寿経には、仏が私共の流転する姿を「有宅憂宅、無宅憂宅」と見られて、而も「衆生苦悩、我苦悩」と今一人の私になりきられて本願を成就されたのである。

1.【仏】この世を去って他の世界に生れかわること、特に極楽浄土に生れ百ること
2. 死ぬこと、あきらめること　3. 河口、国都
4. 庄状＝往生無理におしつけて承知させること
なる振舞もすべき」との言葉との差は、このことをかねてよりよくしろしめす大悲心に抱かれて言えることばで、そこに暗さがなく、同座し同心して下さる有難さがある。

往生について

仏教本来の専門語が通俗化してとんでもない意味に使われている、例えば他力本願が依頼心の代名詞に使われたり、往生ということが困り果てたことや、死ぬことの代名詞に使われていることは残念なことである。

仏教の真目的は煩悩を滅して生死の苦海を脱する道を教えられたのである。我々は唯々欲望満足にかかりはてているが、二元相対の知恵で而も煩悩具足の身としては、事毎に失敗の繰り返しに終るのに、性凝りもなく、明日は、明日こそはと、その夢が捨てられない。

幾山河　越え去り行かば　さびしさの果てなん国ぞ
今日も旅行く

このお蔭で、生死ともに身にもつ業として受けとらせて頂けるのである。そこは、歎異抄に「非行非善」の念仏とあるように、「非往非生」の「ひとへに他力」のお蔭である。私共の相対差別の智慧では心も言葉も及びもつかぬ仏界である。

こうした仏教独自の言葉が、世俗化することはまことに残念の極りである。

平生業成

近角常音先生が名古屋で座談会の時、某医師が、「私は沢山の人の臨終にあいましたが、平素念仏していた人が一番落ち着いた往生でした。然し私自身の死に臨みあんな落ち着きは出来そうもありませんが」とお尋ねした時、先生は坐を改められて「落ち着いた死にかたをしてどうするのですか。人間はみんな芝居気がやみません。私は狂い死にしますのじゃ」ときびしく答えられました。

その先生は脳血栓になられ平素には見られぬ病状でしたが、亡くなられる数日前、会館と学舎をしげ〳〵と眺められて「死にとうもないなあ〳〵」と云われ、いよ〳〵最後は、ナムアミダブツ〳〵と稱えられたと承っております。

親鸞聖人が「臨終まつことなし、来迎たのむことなし。念仏者は平生業成なり」と仰言ったことも、身をもって、先生に教えられました。

その先生が私の病気をお見舞い下さった時、お名号一幅と、短冊に「常観言、またやりそこない〳〵、それだから御見捨てないお慈悲でないか、常音記」と書きのこして下さいました。私は毎日これを掲げて念仏裡にくりかえして拝誦しております。

摂取不捨の故に正定聚に住す

源信僧都四十二の時、一代の仏教を読み続けられたけれど、善導大師の観経四帖の疏を最後のよりどころとして、凡夫の救われる道はお念仏ばかりとなられたが、果して念仏一つで往生成仏出来るのであろうかと、疑雲が消えなかった時、当時、踊り念仏で国中に仏法をひろめていられた空也上人をたづねられて、「念仏によって間違いなく往生出来るでしょうか」とおたずね申した時、上人は直ちに、「自分のような愚僧は知る力はないが、それは釈迦弥陀二尊の仰せだから！」とこたえられた。

これが源信僧都が心眼を開いて、浄土の日本での高僧となられた踏み切りであった。

誰も知る通り親鸞聖人二十九才、六十九才の法然上人から「たゞ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」の仰せに、念仏成仏の白道を高く掲げて下さったのである。

大切なことは御誓のたしかさを身にうけられた人の仰せに安心させて頂くことである。

あとがき

皆様に御心配おかけしております私の病気、順調でありますが、老齢のため体力の恢復が遅々としておりまして、床を払うことも出来ませず「気ながに」と慰められております。御見舞の御返事も出来ませず、御海容願います。

近角先生の信仰或問は、具体的に信の道しるべを頂きました。とかく頭でばかり聞く私共に身をもって聞くように御注意下さいました。

香月院講師の語録は、絶対他力の妙を寸鉄をもってお知らせ下さいました。

柳瀬留治先生は九十五歳になられても、幼児教育と短歌の道にいそしんでおられます。近角先生の直弟子として貴重な方であります。人生の底を見ぬかれての信味は私共に大きな光を与えて下さいます。

井上先生の真実世界は我々が物質と科学のみをたよって物の半面を見おとしている点を指摘されて、生死を越える不滅の真実を教えて下さいました。「我々は陽の当る面ばかりを見て居った」と云った西哲の言葉も思い出されます。

西元先生はお忙しいお生活、どうか健康に御注意下さいますよう願ってやみません。足利浄円先生の生涯かけてお説き下さった中心核を讃仰下さいました。NHKの京都文化センターで歎異抄についてお述べ下さる由であります。

私も歎異抄から聖人の実語にふれ、如来の不思義な本願を頂くようになりました。

岩崎師のお原稿は、何処でも聞けない無相師の法味を、御身にうけて本当にありがたいきわまりであります

法悦その折り〳〵は人の世の旅で教えられたものであります。

御案内

岡崎一道会五月十八日

杉浦豊宅

○

信仰書ご紹介

「倶会一処」著者、熊本市津浦町九―二六　栄木浪雄

定価　三、〇〇〇円

発行所　青潮社、熊本市大江五―十一―十五

おわび　例会はしばらく休ませて頂きます。

定価　半年　八〇〇円（送共）　一年　一六〇〇円（送共）

印刷人　愛知県西加茂郡三好町大字福谷　天野昭夫

発行所　名古屋市南区駅上一丁目十二番地　慈光社

編集・発行人　名古屋市南区駅上一丁目十二番地　花田正夫

電話　八二一局七〇三七番

振替口座　名古屋　六一二四七〇番

郵便番号　四五七

慈光　第三十八巻第四号　昭和六十一年五月十五日発行　（毎月一回・十五日発行）

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可